月　刊

Mélange

富哲世追悼特別号

2017.05.28

月刊「Mélange」
富哲世追悼特別号　2017.05.28
「月刊めらんじゅ」編集部

★追悼文／高谷和幸

富さんへ

安らかならざるタマシイへ、
どんなことばを述べればいいのか、まったく分かりません。
時間（空間を旅する）を考えてみるとき、まるで時間（その時のあなた）は通時的な空間を超えて私たちの前に現前とするでしょう。
わたし（あなた）はなぜ生まれてきたのか？
それを身体なしで考えることが可能だろうか？
そのような時間の疑問（哲学的、文学的）に対して、一般的に流布している人間的な開拓されたビジョンとは違うトポスで、あなたほど明確に語れたひとはいないでしょう。
他者なるものこそ人間の持ち続けるヒューマニズムであり、それが人間を能動的に動かす原動力なのだから。
富さん。
あなたは神戸モダニズムを継承する立場を明確にしてきました。
その時間的、空間的ななかで寺岡良信を先に失ったことは手足をもがれるほどのいたみであったと私たちは想像します。
しかし、モダニズムという時代の少なくとも百年単位の偏向した運動が神戸であったのだろうか。
わたしが注目するのは別のところにあります。それはむしろ、彼をモダニズムと断定することからあなたのいたみは時空を超えた自分のいたみであったことなのです。
その、あなたの「いたみ」の共感が強まってく時に、富さん、あなたの訃報を聞きました。もうあなたに話せることはありません。
最近、あなたが亡くなってしまう前から、わたしのことばに、もの性（他者性）があらわれるようになりました。
もちろんのことですが、あなたにおくることばではないのは重々承知しておりますが、
どうか、どうか、ありがとう、ものとしてまた会おうね。

★詩人・富哲世氏の才を惜しんで／元正章

もう四半世紀前にもなろうか。阪急電鉄王子公園駅近くの高架下にあった画廊「２００１」（清水さんがマスター）で、富哲世さんの詩の朗読を聞く機会があった。
忘れもしない、トリスタン・ツァラの詩。その題名も内容もすっかり忘れてしまったが、ダダイズムの先鋭的な詩を、ものの見事に消化し、肉体化したその朗読には圧倒された。
そこにはまた、禁欲の美みたいなものを感じさせた。日本の詩人富さんはトリスタン・ツァラに成り代わって、演じている。男・白拍子の孤高なる演技、それは余人にはまねできない技芸であった。
これからは、天国にあって、心軽やかにその舞を披露することになろう。

「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫も食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富にあるところに、あなたの心もあるのだ。」（マタイ福音書６章19―21節）
（益田より、愛をこめて）

★富さん／高木冨子

めらんじゅの詩評の場での富さんの批評は厳しく限りなく的確、深く深く胸に沁みました。
詩を詠まれる、その声音は優しく、何故か少し埃の匂いがする穏やかな陽だまりを想いました。不思議な温かさでした。
今、とても哀しく、足元の地面がひびわれ立ち竦んでいます。
安らかに、安らかに。御冥福をお祈りします。

★わたしの「先生」／安西佐有理

二十代の、勉強にも戻れず生業にも疑念ばかりで、煉獄にいると感じながら過ごしていたとき、神戸市民同友会解散、ポスト市民の学校がはじまるという神戸新聞の記事を見た。電話してみたら、やけにぶっきらぼうなおじさんが出てきて恐縮した。
それでもなぜかめげずに、ポートタワーを横目に、へちまモーターブールの近くの路地裏にあった建物を訪ねていくと、チューターだという目の大きいおにいさんとおねえさんがいて、お年寄りから十代の青年までを相手に、詩について語り、シュルレアリスト流のゲームを試みもした。
そのおにいさんとおねえさんは、なにをして暮らしているやらもはっきりしない、年齢もわかるようでわからない、でも詩人ではあるらしい。そんないいかげんな大人たちは、ほぼそれまで見たことがなく、かっこよく、やさしかった。
その時の私にとって、〈富哲世〉は、〈福田知子〉と共に、チューターというよりは若い「神」と「女神」だった。
どうやってここに来たのかと問われて、電話でぶっきらぼうなおじさんが…、と答えると、市民の学校の「守護神」君本昌久さんも笑っていたと思う。おじさんが「神」だったとは、なかなか気づかなかったし、いまだにイメージがむすびつかなくもある。
なにしろ、富哲世さんといえば、まじめな話がとちゅうから、油断しているとだじゃれに着地する、肩に力のはいらない話しぶり。あるいは、ロルカ詩祭での「午後の五時、午後の五時」という「イグナシオ・サンチェス・メヒーアスへの哀悼歌」を暗唱するリフレインの、闘牛もかくやという緊張、祈りや絶望をその場に構築する声。それでなければ、名古屋の同人誌「宇宙詩人」に招かれて高谷和幸さんと三人で珍道中した折に、日本語を解さないフランスの詩人に唯一、フランスにもぜひ来てくれと言わしめた即興的な歌と自作詩朗読の、森のふところに迷いこんで耳にすることばのような、やわらかで強い響きのほうを思いだすからだ。
富さんには、自作を逐一添削したり指導してもらったわけではなかった。でも、ポスト市民の学校が震災のがれきといっしょに姿を消した後、「Mélange」の仲間にさせてもらって以降も、私が書けるとき、書けないときをとわず、そこに何かを見つけて思いがけない一言を贈ってくれた富さんは、「神」だなんてきらきらしい存在ではなくなったにしても、私にとってはずっと、「詩」の「先生」だ。えたいのしれない、ドラマティックで、淡々として、かっこわるく、気高く、しょうもなく、それでも美しいほうへむかって、やさしい目と耳をもって限界まで生きぬこうとする「詩」という行為の。
あの電話のぶっきらぼうなおじさんは、「こんな難儀なところには来なくていいよ」と言っていたのかもしれないが、おっちょこちょいな私はいまだに、そのあたりをうろうろしている。
富さんに出会えてよかった。私の「先生」、ありがとう。

二〇一七年五月二六日、大倉山の病室にて

★富さんへ／にしもとめぐみ

突然、たった独りで黙って逝ってしまった富さん。
あれは秋でしたね。
お見舞にカラフルなパンツを持って行きました。おしゃれなパンツだったんですよ。診察にお召しになったでしょうか？　あの時、帰り際にまだまた会えるんだからって、さよならしましたね。生きてる者は生活の煩わしさや雑事、悩み事にかまけて、病人の富さんを見舞うこともできず、半年ばかりがあっと言う間に過ぎてしまいました。今日の突然の訃報。五月爽やかな風の吹く、薔薇の盛りにあなたは逝ってしまわれた。かなしいです。めらんじゅの例会では、厳しくも温かい合評、それにぼそっとつぶやく、おやじギャグで笑わせてくれましたね。
富さん、偉大な詩人でもあった富さん。あなたが贈った亡き詩友への詩の数々。今度はあなたが贈られる日がこんなに早く来てしまうなんて。あぁ、富さんこんな美しい季節に逝ってしまうなんて、死は永遠のさようならだと言うことをまた噛み締める、今日です。

★弔辞／中嶋康雄

富哲世さんに、惜別の言葉を捧げます。

訃報をうけたときあまりにも突然のことに信じられませんでした。

病気をおして、めらんじゅの合評会に出席されていましたし、ついこの間も

勉強会の発表をされ、終わった後しんどうそうにされてはいましたが、発表の後は健康なぼくでもしんどかったので、さもあらんと思っていました。

ところで、私の初めての発表の内容は「虫」についての話でしたが、欠席された富さんのきつめのメッセージをいただけず、残念に思っていました。

また、虫のことは近いうちにしゃべろうかな、と思っていますので、そのときには、出席していただき、準備不足な私の発表に、厳しい意見をいただけるものと、ちょっとおそれながらも楽しみにしていました。

今年になってからも、ほんとうに「きれのいい」かつボリューム満点の詩を発表されていましたので、

今、こんな形でお別れをすることになるとは思いもよりませんでした。

富さんの詩は、鮮烈な言葉とイメージがどんどんと積み重なり、読者を別次元の言葉の世界に導いていくような詩が多くありました。

力強い詩を最後の最後まで書いて、書くからには妥協を許さないという詩作に対する厳しい思いを貫かれたように思います。

そうして、そんなイメージのまま続けるということ、ぼくにはたぶん真似ができないと思います。

最後に富さんが発表されたとき、さすがにしんどかったのか合評会をする前に帰られました。

そのときの、ちょっと残念そう、さびしそうな顔が今も忘れられません。

そういえば、もっと前の回の懇親会での席でもアルコールを控えておられ、あと自分の病状をある意味「分析的に」語っておられました。そして、いつもぼくにはそれが前向きな語りに聞こえてしまい、なんとなく、「富さんは大丈夫」と思っていました。

最後に会ったときもそう思いました。それだけに残念でなりません。

ご冥福をお祈り申し上げます。

★富哲世さまへ／大西久代

突然の訃報にただ驚いています。富さんの詩の作品は、私には難解ではありますが、大好きでした。

めらんじゅ勉強会でお会いするだけでしたが、作品批評は怖くもあり、楽しみでもありました。

もっと多くの事を学びたいと願っていました。もう作品が読めない　と知ると断腸の思いです。

「けれどもおまえはいのちの誠実を知らない」。この言葉が今、切実に私に響きます。

どうぞ安らかにお休みください。　ご冥福をお祈りいたします。

★追悼文／三谷白水

親愛なる富哲世さまへ。

あなたの訃報に接してとても驚きました。いつかそんな日が来るとはおもっておりましたが、こんなに早く来るなんて。あなたにまずお礼を言いたいのです。拙いわたしの俳句に助言をいただいたり、寺岡さんの出版記念会で祝辞を読み終えたわたしの席までお越しくださり、「三谷くん、よかったよ」と労いの言葉をかけてくださった。あなたは、とてもお優しい方でした。俗語でいい詩が書ける詩人はめったにいるものじゃない。病床六尺は辛く、苦しいものだったでしょう。その苦しみから解放されてあなたの清らな魂は、あの世に召されてゆきます。きっと寺岡さんが待っていてくれますよ。お好きな音楽の話を存分に、自由に語り合えばいいとおもいます。謹んで哀悼の念を捧げます。

★追悼／増田まさみ

ご生前のご活躍とご厚情に思いを馳せつつ心よりご冥福をお祈り申し上げます。

★追悼文／川田あひる

冷や汗が鳥肌の肌につたいます。

昔、初めてメランジュさまへ伺いましたとき、富さんが私に「詩集なに読んでる」と。

「中野鈴子です」と。「知らんなあ」

ひとこと交わしました。

私はその瞬間富さんと詩歌にひとめぼれしました。

ご病気されても、逝ってしまわれるとは思わず、自分の生死にばかり奪われていた時間を残念におもいます。泣くほどの己かと疑いながらなみだがあふれます。

富さん、ありがとうございました。やすらかに。

ご冥福をお祈り申し上げます。

★追悼／堀本吟

悲しく残念なことです。虻曳と二人で、お悔やみにだけ伺いました。北の句会と重なるためにお葬儀には参加できませんがご冥福を祈ります。

★追悼／平井うらら

富哲世氏の訃報をお知らせ下さいまして、心よりお礼申し上げます。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。相次ぐ訃報に言葉もございません。

★富哲世への悼句／野口 裕

スラングの響きなつかし蔦茂る
新緑や締めの言葉が親父ギャグ
朴の花雲の光の行きどころ
虎逝きぬ詩の一節の開けゴマ
午後五時と声あり卯の花くたしとて

★富 詠／岩脇リーベル豊美

永劫に屈服しないための青アネモネ
予感なくキリスト昇天の五月に逝く
残春の窓きみ亡きあとの林檎かな
平凡だけど先に逝った詩人待ってる
雛罌粟の風となり訣別を写真に撮る

★追悼句／髙木敏克

風が吹く富哲世の風が吹く
空よ泣け大海原に空よ泣け
とんと見果てぬ春夢路ゆけ

★ありがとう—追悼・富哲世

杉本真維子

かつて、
「ありがとう

死んでくれて。」
と、あなたは詩に書いた
誤解される、こわい、そうではない、
全部、はねのけて、かなしみのずっと深いところから
死にゆく友へ、祝福の言葉を送った
何よりも、詩に近く、何よりも詩に遠く、
痛みに咽ぶ、芯のなかを
磨いたのだ

ちきしょう、ばかやろう、
怒りの果て
なにもない地面に
枯葉が一枚、落ちてくるように

（富哲世「連星」より）

★五つの音は君か

——富哲世への追悼詩

大西隆志

とまらないのは君の正しい発語の声と
ミシン台の脇に置かれた糸玉の意味
鉄人が意味するのはランドセルを背負った考
　える人の手
つらいのだよ、チルチルミチルと音に出して旅
　立つ
寄せる葉の波、山辺へと日本語が寂しそうに去
　っていくよ

２０１７年５月26日

★哀悼　富哲世詩人

キム　リバク

今年の深紅の秋にはまだ遠く
錦秋もまだ見飽きてはいないはずだのに…

詩人は永遠の若人
老いるのは
詩と詩心を破棄した時だ
君はまだ青春の真っ直中
君の詩の海は広く
君の詩想の山は高かったにも拘わらず
君は残したまま逝ってしまった—

君の詩の香りは
君が詩人である証拠だ
その香りは
密かに畏敬していた僕への永遠の贈り物だ
静かに眠れ、日本詩人・富哲世君よ—

檀君紀元　４３５０（西暦２０１７）年５月27日

時は２０１７年皐月下旬
何故なのか
訃報に
ふと、若稲の清々しい畦道を歩いてみたくなっ
　た—

新苗の端
山の向こう
君の後ろ姿が見える
病魔に蝕まれた身体であっても
まだそんなに急がなくてもよいものを
君は急ぎすぎだ

★口

千田草介

道祖神が
ガスタンクの前に居並ぶ子どもたちに
紙芝居の上演をしながら
赤熱した豆炭でお手玉をしています
彼の口から
シャボン玉のように
ゾロゾロ出るのは
ダジャレの列
それらが豆炭と反応して
幾何学文様じみた
気体のタペストリーを
大空に織り上げていきます
人真似をする鳥たちが眺めながら
カンコカンコと
鳴くでもなくしゃべるでもなく
コロスめいた声を
縷々流しています

★光の背中

黒田ナオ

よく晴れた日には
永遠が見える、というタイトルの
映画があったけれど
その人は本当に
よく晴れた日の朝に
永遠の国へと旅立ってしまった

きらきら光る日差しの向こうで
見えない階段を
二段飛ばしで登って行く
その背中が見える気がして
手をかざして目を細め
空を見上げている

私の知っている人のなかでも
とびきり詩人らしい佇まいをもつその人に
聞いてみたかったことは
まだまだ沢山あった気がするのだけれど

重たい身体を脱ぎ捨てた
その足取りが
あまりにも軽やかだったものだから

もうこれ以上
何も言うことが出来なくて
ただひとり
手を振り続けていた

雲の停留所から
もうすぐバスが出発する

★富 哲世 氏へ

平岡 けいこ

独自の鋭い視点
ウィットに富み
哲学的な面持ちのポムくんの主人(あるじ)
不穏な世に 何を想い 旅立ちを決めたのか
五月晴れの朝
哀しい知らせに喪失の痛み　　合掌。

★ものの降る

月村　香

どうしようどうしても紛れないものが「ものの降る」というものがわたしにも立ちこめてきたな生きるその仕方っていったかなこういうのぼく好きでとかまああなたにはどうとかとか二度怒られてあとはカルメンで寝っころがって詩と自爆してたなそんでみんないつもあなたといっしょにいれるという気でいたからあなたのことをわたしはとても明るくて大きな人に思ってたからお見舞にもそう神戸の海の色の万年筆とインキわたしがわたす役でわたしは無愛想だったけどごめん本当はさ受けとってくださいってほほえんでわたすべきとろを恥ずかしかったからあなたにぶつけるメールをあなたは茶色のミットでやさしく受け止めばかばかしいことで悩むすがたを詩を崇拝するがごとくに毅然と正当化しかつ養護し本当にわたしにもっと他力本願でいいのですよと言いつつご自分にも言い聞かせていられたあなたの詩を崇拝するがゆえの詩の重圧そこからのがれるための孤独の天才はもっと話すべきだと思いますかそんな必要はないですかあなたがどうしたかったのかまあ一度教えてほしい話し合ってわかりあえるならチャンスをくれますんかそれともあなたがそちらを選ばれたのてすか静かに「ものの降る」ばかりですか

★鏡の奥へ逝ってしまった人への哀歌 ——富 哲世の死に際し

冨岡和秀（有時秀記）

「ドアを開ければ
いつでもそこが、なつかしいきみの我が家
だ。
今は消えて天国を泳いでいる
哀しみを帯びた魚や
護られた世界が鏡の奥から黙ってきみを見
つめている。」

かつてあなたはこのような詩行を書いた。一九九三年に世に出されたあなたの詩書『血の月』に収められたその詩作品の題名は、アンドレ・ブルトンの書の題名と同じ「秘法十七番」だ。

黙ってあなたを見つめているのは、「鏡の奥」の世界からで、「魚」は二千年近く前に人類史に湧き立った聖なる秘教（ボイエーシス）の象徴である。隠された鏡の奥から「魚」は詩作に殉じたあなたを見つめている。

さらにあなたは書いていた。

「この澄んだ不在の瞳のもと
落ちるぼくらの世界は、別のいのちへ許され
ている。」

「澄んだ不在」とは肉体を消滅させた純粋無であり、純粋無の眼差しのもとでのみ、その瞳を通してのみ、わたしたちの「落ちる世界」、落魄した世界は、「別のいのちへ」逝くことを許されている。「鏡の奥」から黙って見つめているこの世ならぬ「護られた世界」へ逝くことを許されているのだ。

その鏡の奥へ旅立つには「秘法十七番」とあなたが喩的に名付けたであろう「哀しみを帯びた魚」の秘法が通過儀礼として存在するだろう。

一九四五年に世に出たブルトンの『秘法十七番』も、そのようなエゾテリズム的な意味あいがあったのであり、そもそも『秘法十七番』はタロットの「星」に関わるのだから、同じ題名を付与したあなたにはそれなりに、あるいは無意識的に、「星」への哀しい同一化意識があったのだろう。

ブルトンの書から四十八年後にあなたの詩「秘法十七番」がこの落魄世界において書かれ、いままたその二分の一の二十四年後にあなたはこの世界から、哀しみを帯びた魚のいる「護られた世界」へ旅立った。このような数の秘法もあなたは意図しないままに、「鏡の奥」へ、「なつかしいきみの我が家」へ逝ってしまった。病魔に襲われ続けたなかで、詩に殉じたのは哀しくも聖なる証である。瞑目してわたしもまたあなたの「秘法十七番」の詩作品を我が秘法の哀歌として口ずさみ哀悼する。

★それはそのとき

大橋愛由等

パッションフルーツも
草よもぎ餅
キィウィの鳴き声
かくれんぼして封じたアルミ缶
潰してしまったイチゴミルクも
みんな手の届くところに

ひりひりと
聞こえたふりして
わざとつつましく
すねたふりしても
すっと　そっと　きっと
手が伸びている

そのとき　そのまま　そこまで
吊し上げてきた
木綿の巻き物と

鳥足の行き先を
書き込んだとしても
そこはかと　知らぬままに
つつみこみ

おちていた
おちてゆく
おちている
まなざしも
土のなかで
うごめいている
極微たちの
かなしみも
ささやきのなかに
まとめからめられて
しるされていて

そう、それは
午後の五時
きっかり
午後の五時
そう
そのとき

行きはてのない
赤も　さみどりも　黒茜も
歩行をやめたのは
風をきりきざみ
樹木たちを黙らせ
百の花をちぎり
ミナレットの垂直をあおいだ
あのうた　あのこえ

すこしだけ
ほんのすこしだけ
の語りかけで
水蛇のうれいを
忘れさせた
語りのかずかずは
わすられない
レモネードのかおり
いつのまに
ふりむいていた
その先にあったのは
花弁の奥の
いつくしみ　と
くねることば　であるのだ

★Tさんが逝ってしまった 今朝、骨髄炎で　突然に

福田知子

たった一人で　病院のベッドで逝ってしまった
六人部屋の片隅で
何度も何度も入院しては退院し
腎臓透析したり　癌になったり
何度も入院しては退院して
繰り返しに疲れたのかもしれない
Tさん　Tさん・・・・
私たちもう三五年近くになるね
悲しみが乱暴に腹をゆすってくる
しゃくりあげるような嗚咽に
私たちの時間も空間もシャッフルされる

＊

そうだったね
口永良部島に行ったね
あなたの芝居の知り合いが民宿を始めたとかで
六〇センチもあるような大きな猫が七匹もいて
昔女優だったそこの奥さんが夕飯つくるのをストライキして
しかたなくわたしゴーヤチャンプルー作ったけど
豆腐が鍋に張りついてぐちゃぐちゃになった
島の若い漁師が昼にとった魚を刺身にしてくれた
もう夕暮れていてよくみえなかったけど
鮮度に透き通った魚の白身にやはり白く透き通った小さな虫が
　這っているのがみえた　ようなきがした
「この魚はうまいんだけど虫を食べるとすごい腹痛をおこす」
と島の男
「気をつけて！」と島の女
私たちはこわごわ箸をつけたがあまりの美味しさに虫のこと
など忘れるほどに美味しく呑み込んだ　何度も何度も呑み込
み　夜更けまで島の酒をあおり続けた
昔女優だった奥さんが機嫌を取り直したらしくストライキを
　解いて
ジーンズに着替えたお尻をポンとたたいて
「四五歳にしちゃいけてるでしょ！」と自慢した
島にいると自分で制御できないとんでもない逼塞状態に陥る
　ことがあるらしい
「あのころはたのしかったですね、あの舞台では・・・」とT
　さんが優しく微笑
みながらいったこと
丸いかごいっぱいに猫が巴(ともえ)に丸まって眠っている
そんなかごがふたつ、みつ
猫たちはときどきおきてきては泊り客に愛想を振りまいている
口永良部島の民宿はときおり潮風の吹いてくる演劇空間になる
一夜明けると小さなジープで元男優のだんなさんが海辺の温
泉に案内してくれた
着替えるところもないしシャワーもない
おまけに岩場だったのであきらめた
海までの道は急カーブをきりながらすすむ
海からせりあがるように島は陸地になる
男性的な黒い火山が島のどこからでも意識できるほどに聳え
　立つ
猟犬を繋いでいる家の前を通りかかるのは命懸けだ
だれだか四匹の獰猛な猟犬にかみ殺されたことがあったとい
　う話を聞いた
檻に入れられた犬のそばを通りかかった
においを嗅がれた気がして震えた
こんな気持ちも島特有の逼塞間に通じるのかもしれない
とつぜんあの島の逼塞間が共感覚としてやってきた
あなたの死に締めつけられながら・・・

＊

膠原病かもしれない　わたし
膠原病って自分で自分を殺す病気だって
詩人らしくていいね！　とTさん
三つ子のタマシイ百まで
キューピーさんは三つのときからいっしょなの
百日咳で長患いしたこと　小児麻痺でずっと病院にかよって
　いたこと
そんな話をしていたら「ボクが負ぶっていこう」と
キュウちゃんにバンダナ撒いて商店街を歩いて病院にいった
　いっしょにいってくれた
病院の帰り道は芋虫ゴロゴロ
膠原病に追い打ちをかけるように
これでもかっていうふうに
Tさんは凍りついて力なくその場に立ち止まってしまった私に
大きな背中を向けた
キュウちゃんと一緒に負ぶってあげるから大丈夫…って
あたたかかった　おおきな背中はたのもしくあたたかだった
Tさんのバンダナ　キュウちゃんのバンダナ
涙が出てきた
私　もうすぐ死ぬかもしれない
涙が出てきた　膠原病かもしれない・・・だけど
二人の後ろ姿　おそろいのバンダナに笑えた
健康びとのように無邪気に笑えた

＊

もう一度会っておきたかった
死者に対していつもそんな後悔ばかり
また今度も繰り返している
もう一度でも病院に行っておけばよかった
もうひとりのTさんのときもそうだった
好きだったひとたちが消えていくこの世界
死んだら偏在できるからいつもそばにいるのかもしれないの
　だけれど
自分の生活が変わっていくように人の存在意識もいつのまに
　か遠ざかって
死んでから後悔して　引き寄せて　また後悔して・・・
追悼することは共にここに居るということ
偲ぶことは死者と感情を共にするということ
だけど　だけど
いま　ここの　明日は　みえない・・・

★アジトの話 ―トミさん追悼

今野和代

撤回！
テッカイ
嫌だ　カミさま
インク色に濡れる朝
しょっぱい塩のような
光の梯子階段を降ろして
空虚の速度で急降下して来て
頑なな胡桃を不条理の手で包み
忽ちふわりとまっぷたつに割ってさ
秘そやかに孤立するデコボコしたイビツの
独りぼっちの甘やかな実を取りだすように
蒼く眠るトミさんをゆらゆら揺り起こしたね
湧きたての泉の鮮烈さに澄む彼の眼差しが開き
人懐こい賢い眉が少し動いてどんな対話が始まった？
ダッダッダッと銃を撃つ真似をして背中をつんのめらせ
「俺たちに明日はない」のギャングのクライドみたいな素早さで
不敵に片目を瞑ってみせてそれから秘密のアジトの話をしただろ？
それから片羽根だけで飛翔するボロボロの破れかぶれのミヤマカラスアゲハ
の歪んだ透き通る微かな青が消えていく先のもっと遠いギザギザした一陣の風
に乗って飛行士たちが「行ってきます」「お母さん。ありがとう」とも言わないで
真昼野の水平線に消えた蛍火のような　吹雪の峠を行く瞽女さんの
忽ち消えていく足跡みたいな　一瞬のまあるい沈黙について
緑になだれる五月の川を一匹で昇っていく虹の鱗の魚
草を刈る老いた人を照らす雲の光線の柔らかな羽
ノックダウン寸前のボクサーが越えるロープ
ユーラシアを越えてく駱駝の背中の孤独
「いかさま師」の女たちの流し眼の先
イノチの触手をすっと伸ばして
もう少し　もう・・スコ・・シと
トミサンが対峙していた
熱と火照りと遠い声
揺れる物語の吐息
もうがらんどう
のからっぽの
テッカイ
撤回！
てんしのそくどにろうかはさむ

★富さんへ／飛鳥井れん

富さん、今、訃報のメールを見たよ
驚きと混乱
すぐに追悼詩なんて、できないよ

心の断片みたいな言葉で、ごめん・・・
初めてお会いした時、富さんはもう病気
　と闘っておられて
時につらげで、時に痛々しかった。
なのに、今、思い出す富さんは
頭が良くて、言葉自体に重みと存在感が
　あって、鋭くて、
というのは言うまでもないことだけど
なぜか立ち姿は、精悍で、強靭で、何よ
　りも男の色香に包まれている

富さん、いい男だったね

難解で晦渋な哲学のエッセンスを、身近
な言葉のブーケにして心の掌にのせて
　くれたし
私の詩についても、あまりに滋養のある
　アドバイスをくれたので
思わず、この人と一緒にいたら、こんな
私でも詩人になれるかもしれない・・
なんて

富さん、いい男だったね

男の色気がムンムンしていた
男っていうと語弊があるかな・・。うま
　く言えないけど・・
独り立つ「孤」(個)としての人が醸し出
　す芳香みたいなもの
魂なんかなぁ
魂の立ち姿みたいなものが、とにかくか
　っこ良かった

だから、思い出すイメージは、野武士
群れにならず、自分の足と腕と言葉の刀
　だけで
荒涼とした野を自分の光と陰を背負い
　ながら風浪といく野武士のイメージ

富さん、いい男だっ たよ

さみしいね
せつないね
ありきたりの形容詞しか浮かばないけど
富さん、あなたのような詩人が、こんな
　に早く逝ってしまうなんて
あぁ、あまりに惜しい
もったいない・・その一言に尽きる

支離滅裂で・・ごめんなさい

二〇一七年五月二八日

われらが畏友・冨哲世氏の追悼特集を組みました。
原稿をよせていただいたすべてのみなさん、感謝します。
富さん、よき旅を、願っています。
大橋愛由等

富哲世（1954-2017）
詩人。2017 年 5 月 26 日〈金〉午前 7 時 30 分ごろ急性呼吸不全のため神戸市東灘区にある甲南病院東館 2 階 2216 号室にて逝去されました。享年 62 歳。

富哲世追悼特別号
月刊「Mélange」特別号
神戸

2017 年 05 月 28 日　特別号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等 (「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600 円(税別)